

1-7 みほとけに花一輪 - 古代の萱田・村上に暮らした人々 -

(令和6年7月21日 講演)

蕨 由美

村上込の内遺跡は、村上団地造成時の発掘調査で、多くの竪穴住居・掘立建物跡が見つかり、奈良・平安期の大集落跡として、国立歴史民俗博物館でも復元景観のジオラマとともに、瓦塔の破片模型なども展示された注目すべき遺跡である。

その後、萱田遺跡群や上谷・栗谷遺跡の発掘調査で、土器の墨書などから、古代の「印旛郡村神郷」が村上地区のみではなく八千代市全域に広がっていたことと、そしてここに住んだ人々の暮らしがわかってきた。

1. 古代の萱田・村上に住んだ人々の暮らし

村上込の内には、8世紀前半～9世紀後半までの集落があり、住民は「丈部」姓をもって「印旛郡村神郷」に帰属し、谷津には水田、台地上には畑が造られ、馬を飼い、鉄の農具を使って耕作していた。

竈を備えた竪穴住居で甑を使って調理し、土師器の甕や皿を使って食事をし、紡錘車を使い、布を織るための糸を紡いでいた。掘立建物や墨書土器、官人の身に着ける石帯などから、文字を識る人がいた。

手づくね土器や、人面や神に捧げる文字のある墨書土器などから、伝統的な神祭りが行われ、また小仏像、仏鉢、瓦塔、「佛」や「寺」銘の墨書土器、須恵器壺、灯明具などの仏教関連遺物、また四面庇掘立建物の出土から、仏教が民衆に浸透していたことがわかる。

2. 萱田・村上の古代集落と出土した長頸瓶「壺G」のなぞ

萱田・村上の遺跡から長頸瓶「壺G」が出土している。これは8世紀末～9世紀初めの遺跡から出土し、形から「壺G」と分類されるスリムな須恵器で、その用途は、①仏に供える花瓶、②調味料を運んだ容器、③東北侵攻の兵士が携えた水筒など諸説ある。

このうち「仏に供える花瓶」という説は、観音像の持つ花瓶と須恵器壺の変遷の中で壺Gが古代花瓶の形態に類似することによる。

村上込の内遺跡では壺Gと、瓦塔片や「前卍」(=「菩薩の前に」)・「奉」・「聖」・「利多」(=「利他」)などの墨書土器・仏鉢(瓦鉢)・灯明皿・火打金などが出土。さらに各地の18の遺跡の様相を検証すると、壺Gは仏教に関連する遺構と遺物と共伴している。

8世紀後半～9世紀の壺Gの伝播は、民衆レベルの仏教の急激な拡大と東国の開発の促進が背景にあり、萱田・村上の小集落でも人々は小堂にみほとけの像を祀り、花一輪をこの花瓶に挿して供えたのであろう。

村上込の内遺跡出土の長頸瓶「壺G」⇒

